



タイ ワットパクナムよりの奉迎仏プラ・プッタ・チナラート



คติภพนี้ (หลวงพ่อวัดป่ากุ๊ฟ)
ในวัดป่ากุ๊ฟ จังหวัดเชียงใหม่ ประเทศไทย

พระมงคลสากลนี้ (หลวงพ่อวัดป่ากุ๊ฟ)
ในวัดป่ากุ๊ฟ จังหวัดเชียงใหม่ ประเทศไทย

上座部傳教式を終えし

日本の仏教は多くの宗派に分かれ、その說とされるは異なり、互に反対の立場で一面も見られ、それが釈尊の正しき教えなのか。これは私が若て頃はじめて仏教に接したときの率直な疑問でした。それで私は「宗祖を通して釈尊に還る」と云ひました。私の宗教活動の基盤としました。本山修行を終えて画かれたインデーズの躰参拝に出かけたのも、帰途タイに立寄つて一年有余修行したのもそのためであつま。やがて五十七年に建立した建物を本堂と云ふ、あえて「釈迦殿」と称したのも、また宗派の如何を問わず有数の人材を海外に派遣してくるのもそのためであつま。

つい、タイ國にむかつて私が修行したワット・パクナムに留學を出してもつあが、既年四十參上した折、住職から、

「やはり日本で傳度式を挙げたい。いま日本・タイ仏教の交流をはかるために、あなたの協力で実現でもないものか」と強く要望されました。」の趣説により実現したのが本回目の「日本の私の四人の息子の傳度式」であつた。

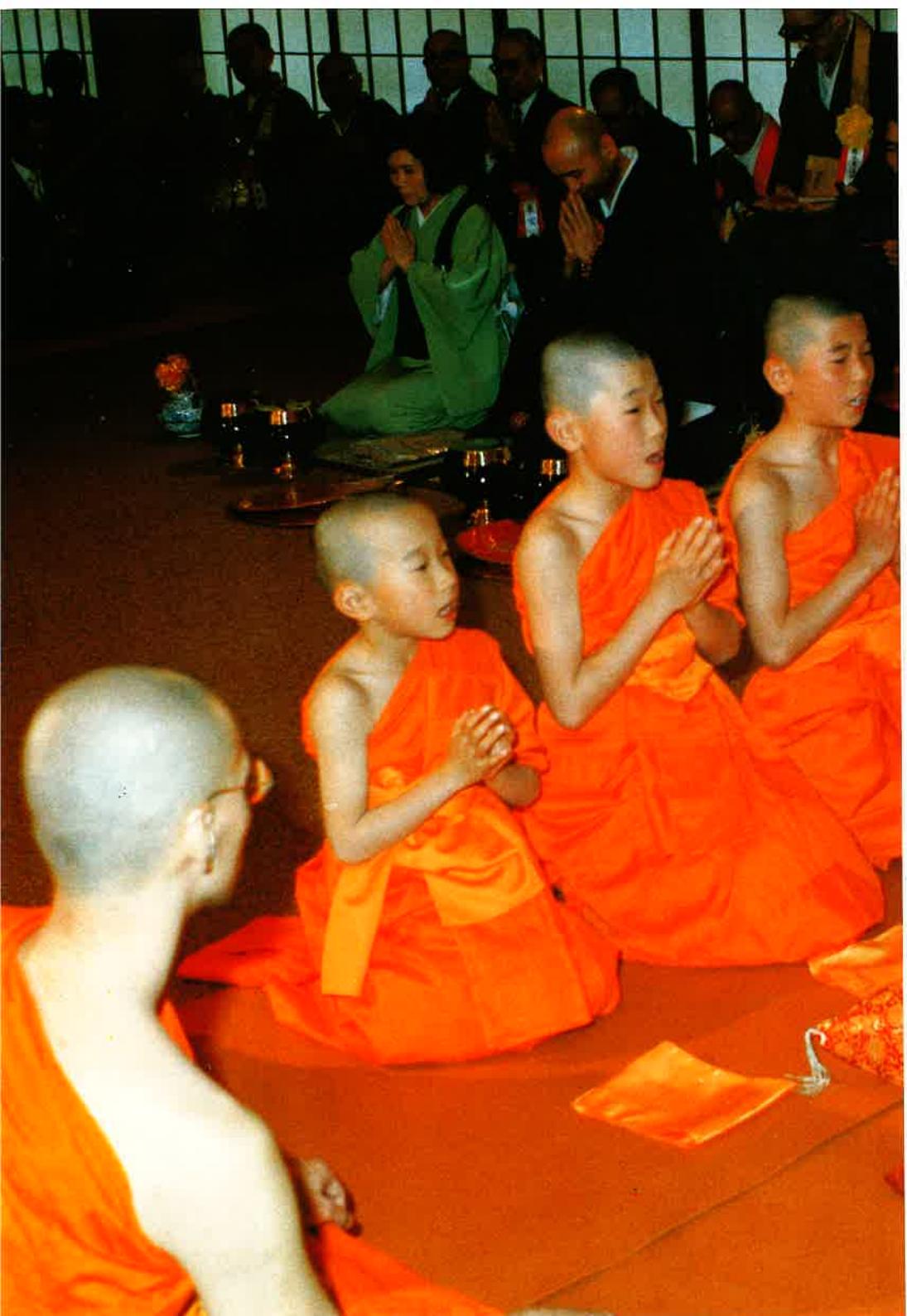
『宗教と現代』誌に東隆眞博士は、

“タイ国の高僧が日本に赴かれて戒師となり、日本人のために授戒したところによれば、おもろく、中国の高僧、鑑真、和上が東大寺戒壇院を建て、日本人僧に授戒して以来のことではあるまい。しかし日本・タイ両国の仏教史（戒律史）上、新しいページが書き加えられたことになつた。”

と述べて下やつてこおる。

大乗仏教と南方（上座部）仏教の交流のことになると、法縁に支えられ、一段の精進をと深く心に警つておつまむ。





特集／タイ法式による得度式

田口 田

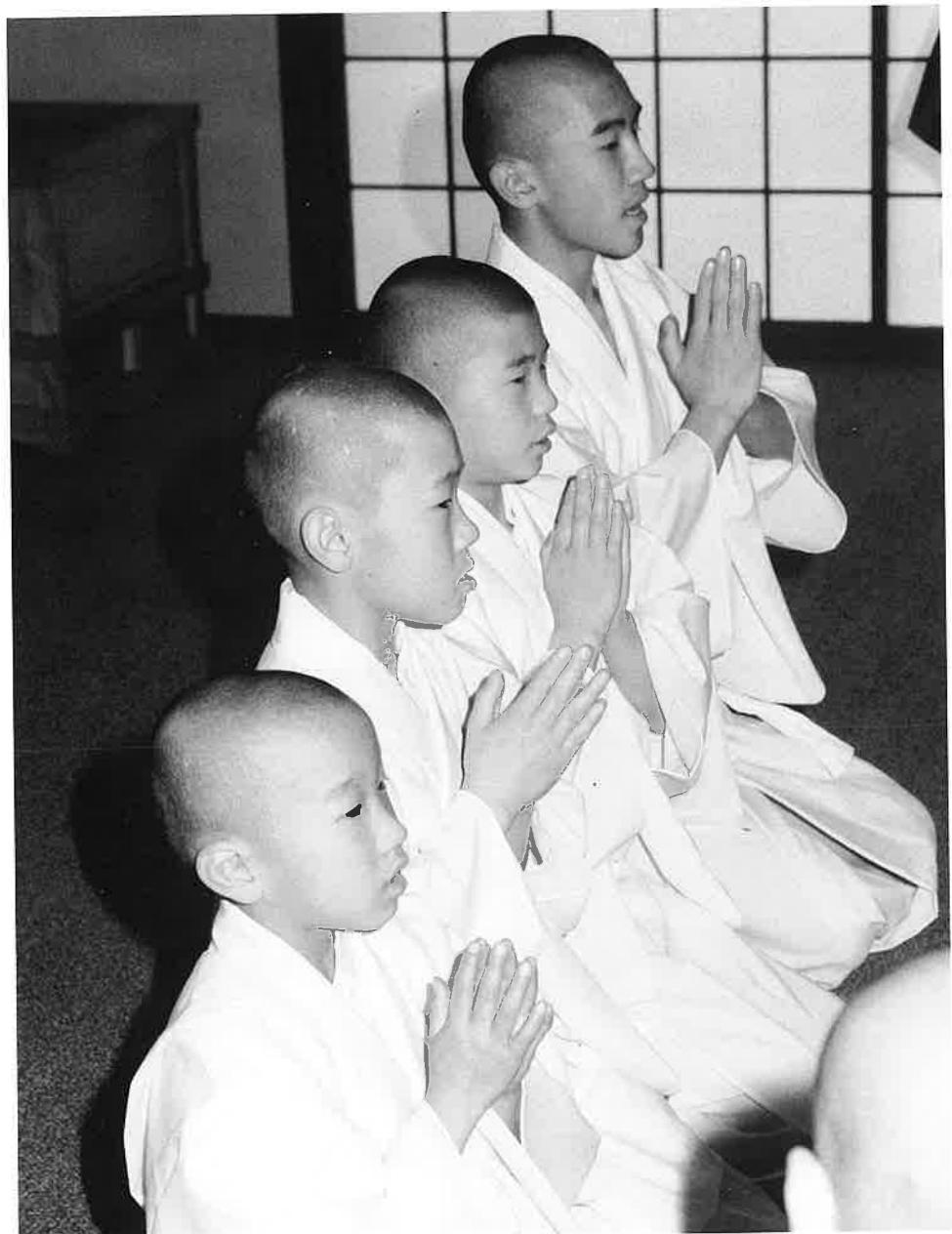
日本で初めてひつねいなわれぬ、タイ仏教の「パサンパタ（得度式）」を前に、今日に緊張が漂つてした。

当日在職とは深く縁で結ばれていたタイ國・ワッテ・パクナム住職・ブリ・タム・パンヤー・ボティ師の強烈な要望で実現のはじびとなつた上座部得度式であるが、当日在各界からのびのび臨席を得て、厳かに式がすすめられた。

得度式とは、「陀の教え」に導かれ比丘となる儀式であるが、この日タイの上座部仏教の得度式を受け、戒を授かつたのは、まだ幼い四人の子息である。儀式はあぐてパーラー語で成りれるため、子息たちなりといつてはじめて接吻の興味の細せ、それだけでもびしこ行であつたに違ひない。

戒師のブリ・タム・パンヤー・ボティ師の前に座し、声を揃えてパーラー語を唱える姿には哀しくまでの通りかさがあふれ、参ぶ者に深い感動をよみだした。

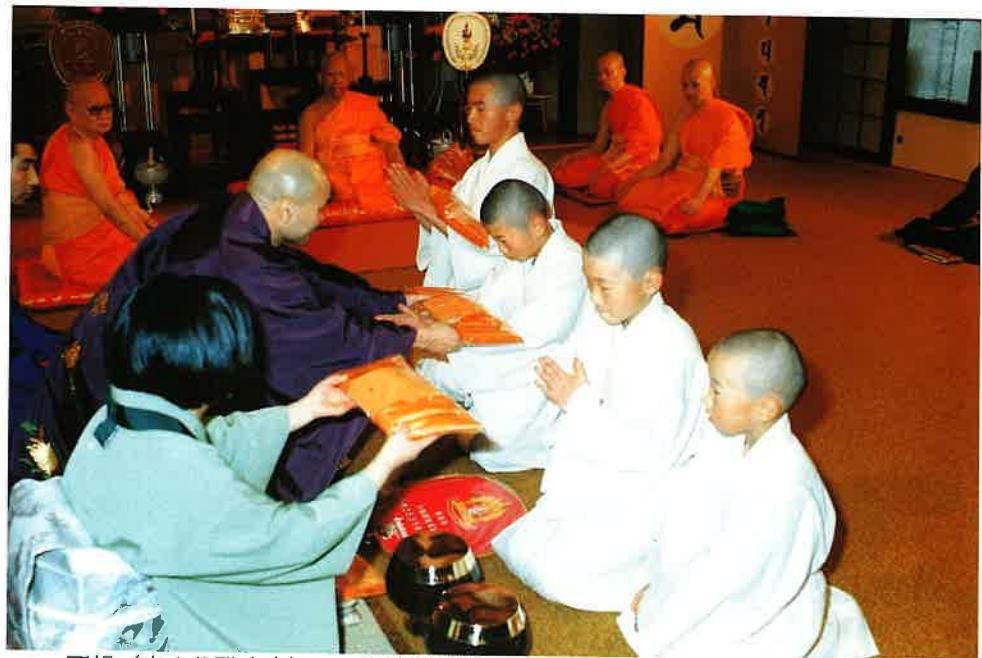
（詳細は本文に掲載しましたが、ここではその一端を順を追つて紹介いたします。）



淨髪し、白衣をつけて戒師に罪過の許しを請う



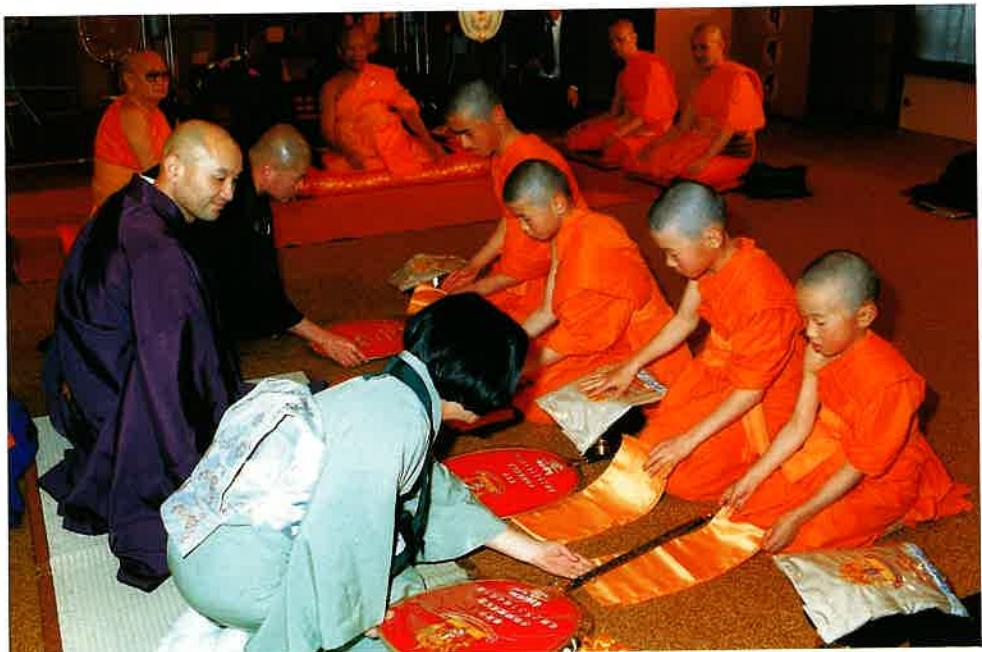
戒師、プラ・タム・パンヤーボディ、ワットパクナム住職



両親（当山住職夫妻）から三衣の供養を受ける



三衣を捧げて戒師に出家の許しを請う



タイの僧形で両親から供物を受ける

聖なる巣立ち

赤間義徳



タイの尊師様がパーリ語で戒を授与された方丈様の四人のご子息が
方丈様に教わったパーリ語で
一心に唱和している。

その声は時空を貫いて
お釈迦様が生きていらっしゃった
古代インドの

光きらめく静澄な空間に響いている。

仏誕二五五四年四月二日

成寿山「善光寺」釈迦殿に

四人の少年僧が誕生した。

仏法と善光寺を守護する

黄衣の四天王のように。

あなたがたは

大乗と小乗を超えて

釈尊に還る道を果敢に開拓するだろう。

あなたがたとともに

方丈様の大誓願は

豊かに成長し盛んに実つていくだろう。

それは確かにことなのだ。

見よ！

ワット・パクナムより寄進された

仏陀像も金色の微笑を湛えて

聖なる巣立ちを祝つておられるではないか。



タイの黄衣をまとう子息たち



戒を受けられた、タイの僧となつた彼らは、たゞえ母親といえども、女人に触れることができない。タイの留学生が彼らの身支度を整えてくれた。



奉迎仏の開眼法要 四月一日



得度式に先だって、タイ国ワットパクナムから寄贈された釈迦牟尼仏坐像プラ・プラチナラートの開眼法要が厳修された。

曹洞宗大本山總持寺監院・斎藤信儀老師を導師に戴き、宗門内外・各界の諸先生たちが列席して、金色にひかり輝く等身大の釈迦牟尼仏坐像を迎えた。